

ベルリン国立図書館所蔵・ペルシア語農書写本の断片 について

清水, 宏祐
九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門 : 教授 : イラン史

<https://doi.org/10.15017/10311>

出版情報 : 史淵. 145, pp.57-81, 2008-03-01. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン :
権利関係 :



ベルリン国立図書館所蔵・ペルシア語 農書写本の断片について

清水 宏 祐

はじめに

ベルリン国立図書館の東洋部には、Ms.Orient.fol.310という整理番号の写本がある。タイトル、原著者、筆写者、筆写年代は一切書かれていない。内容は、ペルシア語の農書であるが、これまでに報告もなされておらず、詳細は不明のまま放置されてきた。

この写本については、筆者は他の農書写本とともに、所在とその体裁について簡単に述べたことはあるが、詳しい内容については触れることがなかった(清水1)。

本稿では、この写本に書かれている内容について、概要をまず紹介し、次に、扱われている作物の種類を明らかにする。また、いくつかの作物の農法をとりあげ、どのような特色があるかについて述べよう。そして、この農書断片の記述内容が、他の農書と、どのように重なり、また異なるかについて論究してみたい。

写本の体裁

写本の大きさは、32×16センチ。全部で28フォリオよりなっている。紙の質は、やや腰があり、白っぽいもので、すかしてみると、細かい漉き跡の横線が走っている。紙はさほど厚くはなく、全体の印象は新しいものである。日本の障子紙を思わせる、特徴のある材質である。紙質からすると、この写本の成立年代は、19世紀の後半ころかと推定される。

文字は、かなり書きなれた写字生によるもので、流麗とまではいえないものの、中の下程度のうまさといえよう。文字につける上下の点は省略されている箇所が多く、品種名では判読困難な箇所もある。ペルシア語の P、CH、G を表す点・線は、やはり表記されていない。

フォリオを綴じるための「帳合記号」としては、次のフォリオの表面（おもてめん）(a) の最初の単語、前のフォリオ裏面 (b) の文字行最下部の左下に書き込まれている。

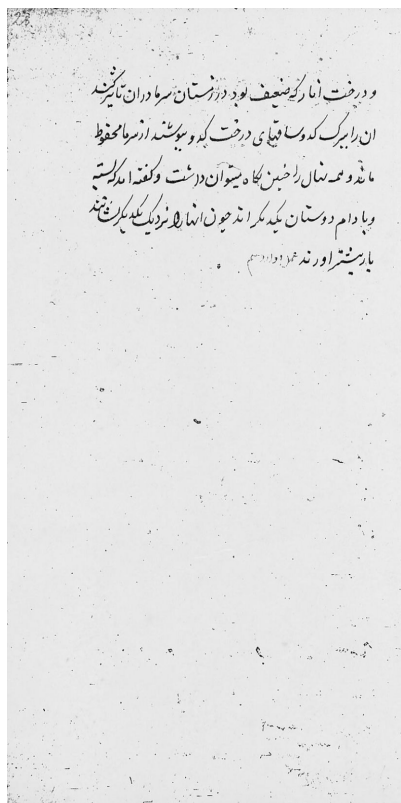


写真2 同、第28フォリオ表 (fol.28a)

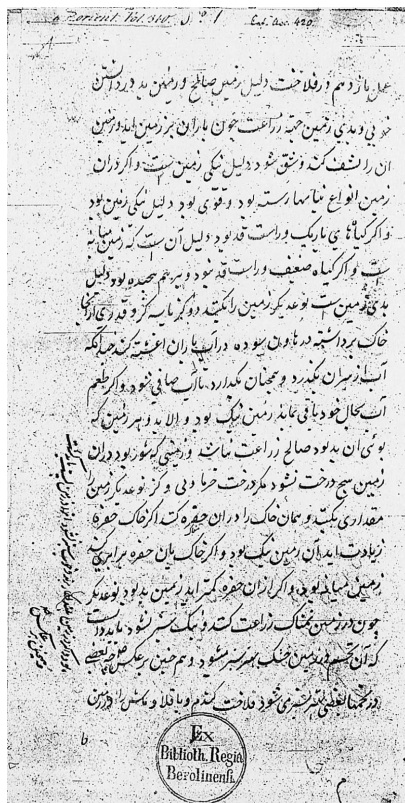


写真1 ベルリン国立図書館蔵ペルシア語写本 Ms.Orient.fol.310 の第1フォリオ表 (fol.1a)

一面あたりの行数は、18行と一定しているが、書き込めなかった単語を本文の文字の上か下に書き加えているところが再三みられ、時間に追われて書いたもののように思われる。

写本の文中の見出し

表題も、全体を区分けする章（ファスル、バーブほか）もない。

第1フォリオの裏面 fol.1b には、「農業 (filākhat ママ・以下同様・filāḥat が正しい) における第11番目の仕事 (‘amal-i yāzdahom) 適正な土地と悪い土地しることの手引き」とあり、最終フォリオ fol.28a には「第12番目の作業」とあって、中身は書かれていない。

Fol.1b 以下の部分では、見出しのかわりに、文中のいくつかの語句が赤で書かれている。以下、赤で書かれている部分（筆跡は、同一人によるもの）を抜き出してみよう。

Fol.1b

土地の改良 (sālīḥ kardan-i zamīn)

除草の効用 (fā’ida dar pāk zamīn az giyāḥ)

Fol.2a

大木の植え替え (dar naql kardan-i dirakht-i buzurḡ)

Fol.2b

農作業の障害 (azīyat-i filākhat)

ざくろの農作業 (filākhat -i Anār)

fol.3a

ゆりの農作業 (filākhat-i Sūsan)

接木の農作業 (filākhat-i paywand)

農作業の場所 (filākhat•gāḥ)

Fol.4a

農作業とある種の桃（ここまでが赤字、「をりんごの木に接木する…」と続く文

章の一部 filākhat wa ba‘dī Shaftālū)

fol.4b

マルメロとりんごについての注意すべき農作業 (filākhat-i dar nigāh dāshtan- i Safarjal wa Sīb)

桃の農作業 (filākhat-i Shaftālū)

fol.5a

ハッカの農作業 (filākhat-i Na‘nā’)

なすの種の農作業における驚異 (‘ajā’ib bi-filākhat-i tukhm-i Bādinjān)

ナツメヤシの農作業 (filākhat Nakhl ここからは、アラビア語表記となるので、エザーフェは付けない)

fol.6a

ブドウの木の農作業 (filākhat shajar al-‘Inab) (dirakht-i Angūr)

fol.8b

イチジクの木の農作業 (filākhat shajar al-Tīn) (dirakht-i Anjīr)

fol.9b

オリーブの木の農作業 (filākhat shajara al-Zaytūn) (az dirakht-hā-yi sharīf 「高貴な樹木の一つ」とのペルシア語による補注がある)

fol.10b

ざくろの木の農作業 (filākhat shajara al-Rummān) (dirakht-i Anār)

fol.11a

りんごの木の農作業 (filākhat shajara al-Tuffāh)

fol.11b

洋ナシの木の農作業 (filākhat shajara al-Kummathrā)

fol.12a

マルメロの木の農作業 (filākhat shajara al-Safarjal)

桃の木の農作業 (filākhat shajar al-Khūkh)

fol.12b

スモモの農作業 (filākhat shajar al-Ijjāṣ) (dirakht-i Ālū) (Prunus Domes-

tica)

アンズの木の農作業 (filākhat shajar al-Mishmish) (dirakht-i Zard Ālū)
(Prunus armeniaca)

桑の木の農作業 (filākhat shajar al-Tūt)

fol.13b

さくらんぼの木の農作業 (filākhat shajar al-Qarāṣīya)

栗の木の農作業 (filākhat Shajar Shāh al-Ballūt)

どんぐりの木の農作業 (filākhat shajar al-Ballūt)

fol.14a

アーモンドの木の農作業 (filākhat shajar al-Lawz)

fol.15a

ピスタチオの木の農作業 (filākhat shajar al-Fustuq)

はしばみの木の農作業 (filākhat shajar al-Funduq)

fol.15b

なつめの木の農作業 (filākhat shajar al-‘Umnāb)

ビーク (クロウメモドキ Ziziphus lotus) の木の農作業 (filākhat shajar Bīq)
(dirakht-i Kunār)

-----の木の農作業 (難読箇所) (filākhat shajar al-----)

ガブラーの木の農作業 (filākhat shajar al-Ghabrā)

fol.16a

びわの木の農作業 (filākhat shajar al-Kundush)

テレビンス (Pistacia terebinthus) の木の農作業 (filākhat shajar al-Buṭum)

fol.16b

テンニンカの木の農作業 (filākhat shajar al-Āth)

バルベリーの木の農作業 (filākhat shajar al-Anbarbārīs) (dirakht-i Ziri-
shk)

ヘンナの木の農作業 (filākhat shajar al-Ḥinna)

スンマークの木の農作業 (filākhat shajar al-Summāq)

傘松の木の農作業 (filākhat shajar al-Ṣanawbar)

fol.17a

糸杉の木の農作業 (filākhat shajar al-Sarū)

ゼニアオイの木の農作業 (filākhat shajar al-Alb) (dirakht-i Khubbāz)

はくようの木の農作業 (filākhat shajar al-Bayād) (Dirakhte-i Sepīdār)
(Sefīdār)

ヒラフ (Salix pentandra) の木の農作業 (filākhat shajar al-Khilāf)
(dirakht-i Bīd)

fol.17b

タマリスクの木の農作業 (filākhat shajar al-Ṭarfā)

シトロンの木の農作業 (filākhat shajar al-Utruj)

ナーランジュの木の農作業 (filākhat shajar al-Nāranj)

fol.18a

レモンの木の農作業 (filākhat shajar al-Laymūn)

バラの木の農作業 (filākhat shajar al-Warda)

fol.18b

ノバラの木の農作業 (filākhat shajar al-Nasrīn)

ジャスミンの木の農作業 (filākht shajar al-Yāsamīn)

アルグワーンの木の農作業 (filākhat shajar al-Urjwān) (dirakht-i Argh-
uwān)

ゴルナールの木の農作業 (filākhat shajar al-Kulnār) (dirakht-i Gulnār)

ココナッツの木の農作業 (filākhat shajar al-Nārajīl)

fol.19a

バナナの木の農作業 (filākhat shajar al-Mawz)

サトウキビの「木」の農作業 (filākhat shajara Nay Sukkar)

桂皮 (Cassia fistularis) の木の農作業 (filākhat shajar al-Khiyārjanbar)
(dirakht-i Khiyārchanbar)

fol.19b

タマリンドの木の農作業 (filākhat shajar Tamr-hindī)

藍の木の農作業 (filākhat shajar al-Nīlaj) (dirakhte-i Nīla)

バラードル (Semecarpus anacardium) の木の農作業 (filākhat shajar al-Balādar)

胡椒の木の農作業 (filākhat shajar Filfila)

カーネーションの木の農作業 (filākhat shajar Qranful)

fol.20a

ナツメグの木の農作業 (filākhat shajar Jawz al-Ṭīb)

カルダモンの木の農作業 (filākhat shajar al-Qāqulla)

クベバの木の農作業 (filākhat shajar al-Kubabā)

タンブールの木の農作業 (filākhat shajar Tanbūl)

藍の木の農作業 (filākhat shajar al-Nīl)

シナモンの木の農作業 (filākhat shajar Dār Chīnī)

fol.20b

白檀の木の農作業 (filākhat shajar Ṣandal)

沈香の木の農作業 (filākhat shajar al-‘ūd)

fol.21a

すおうの木の農作業 (filākhat shajar al-Baqam)

黒檀の木の農作業 (filākhat shajar Abnūs)

マンゴーの木の農作業 (filākhat shajar Anba)

fol.21b

ハバーラの木の農作業 (filākhat Habala) (ペルシア語でも dirakht-i Habala と、同形で説明している)

カロンダの木の農作業 (Carissa carandas) (filākhat dirakht-i Karūnda)

稲の農作業 (filākhat Birinj)

小麦の農作業 (filākhat Khinṭa)

Fol.22a

大麦の農作業 (filākhat Sha‘īr)

ヒヨコマメの農作業 (filākhat Nukhūd)

ソラマメ (Faba sativa) の農作業 (filākhat Bāqilā)

fol.22b

ミレットの農作業 (filākhat Arzan)

インゲン豆の農作業 (filākhat Māsh)

レンズマメの農作業 (filākhat ‘Adas)

カルサナ (マメの一種) の農作業 (filākhat Karsana)

棉の農作業 (filākhat Qutun)

麻の農作業 (filākhat Kattān)

fol.23a

ゴマの農作業 (filākhat Simsim)

藍の農作業 (filākhat Nīl)

アカネの農作業 (filākhat Rūyās)

コリアンダーの農作業 (filākhat Kuzbura)

クミンシードの農作業 (filākhat Kammūn)

フェネルの農作業 (filākhat Rāzyānj)

ディルの農作業 (filākhat Shibitt)

ナー・ハーフの農作業 (filākhat Nā Khwāh)

ターメリック (胡蘆巴) と大麻の農作業 (filākhat Ḥulba wa Khashīsh (ママ・
Ḥashīsh))

マスタードシードの農作業 (filākhat Khardal)

Fol.23b

マメグンバイの農作業 (filākhat Rashād)

ハリール (白檀と黒檀の総称) (filākhat Ḥarīl) の農作業

「ハリールには二つの種類がある。白いものを白檀 Sandal (前出 fol.20b) と呼
び、黒いものをヒンドゥという」

ひかげのかずら (filākhat ‘Arshaf) {とすべりひゆ Baqala al-Hamqā’ と綿の
種を一緒に播くのがよい…}

ハッカの農作業 (filakhat Na'nā') (前出の語句と同一だが、こちらが「各論」部分)

セロリの農作業 (filākhat Karafs)

レタスの農作業 (filākhat Khass)

キャベツの農作業 (filākhat Kurunb)

サルク (葉物野菜) の農作業 (filākhat Salq)

fol.24a

にんじんの農作業 (filākhat Jazar)

fol.24b

ラディッシュの農作業 (filākhat Fujul)

カブの農作業 (filākhat Shalgham)

たまねぎの農作業 (filākhat Baṣal)

にんにくの農作業 (filākhat Thūm)

fol.25a

にらの農作業 (filākhat Karrāth)

シナモンの農作業 (filākhat Zanjabīl)

バジリコの農作業 (filākhat Rayḥān)

水仙の農作業 (filākhat Narjis)

fol.26b

甘松の農作業 (filākhat Sunbul)

スイカの農作業 (filākhat Bittīkh)

fol.27a

胡瓜の農作業 (filākhat Khiyār)

かぼちゃの農作業 (filākhat Qar')

ソラマメとレンズマメのような穀物の種を播く {ときの注意}

fol.27b

作物の病害を防ぐことの効用

……以上の効用を述べておいた

「第12番目の仕事」(‘Amal-i dawāzdahom)

以下余白

となっている。これらの赤で書かれた部分は、章のタイトルではなく、この言葉から、作物を容易に検索できるようにするために付けられた「見出し」の働きをしている。

この一覧をみると、この写本は断片ではあるが、農書の標準の構成要素を備えていることがわかる。

内容は、土壌の改良からはじまり、樹木の植え替え、病害虫の駆除、作物栽培法各論からなっている。作物は、樹木(果樹、花木の区別がないのはイスラム世界の農書の常である)の部分が大勢を占め、穀物、野菜については、やや簡略で、扱われている作物の種類も少ない。最初と最後のフォリオに「第11番目の仕事…」「第12番目の仕事」とあって、少なくとも全部で12以上の「仕事」(他の農書の「章」に該当する)からなる農書から一章を抜き出したかのようなのである。しかし、内容の点では、これだけで独立した農書の体裁をもっている。抜き出したとすれば、一章そのままではなく、必要な「農作業」ごとに抜き出した農事の覚書となっているようにみえる。

「農業」「農耕」「農法」「栽培法」「農作業」などと訳されるフィーラーハ(filāḥa, filāḥat)は、アラビア語起源であり、アラビア語、ペルシア語農書では、ごく普通に、かつ頻繁に使われる言葉である。たとえば、『農書』(この題名の農書の作者は多数ある)は、Kitāb al-filāḥa、有名な、イブン・ワフシーヤ(Ibn Wahshīya)の『ナバティヤ人の農書』は、Kitāb al-filāḥa al-Nabaṭīyaという。野菜栽培の各論であれば「栽培法」と訳すが、樹木も含めて、すべての箇所に使われているので、本稿では、「農作業」とした。

この語句 filāḥa が、この写本では一貫して filākhat (上に点を付けない [ḥ] にことさらに点を付けて [kh] と表記していることは、写字生の素養に疑問を感じさせるものである。ペルシア文字を書きなれたような筆跡と、語句を理解していないこととは、矛盾するところである。

同一写本内で、「樹木」を「デラフト dirakht とペルシア語で表記しているところと「シャジャール shajar」というアラビア語を使用しているところがあるのも、奇妙といえる。Fol.2a では、「樹木」以外の用語もペルシア語であるが、fol.6a 以降の作物各論のところでは、一貫して、アラビア語の「シャジャール」 「シャジャラ shajara」が使われている（唯一の例外は、Fol.21b の「カロンダ」で、ここでは filākhat-i dirakht-i Karūnda としていて、shajar の語は使われていない。Karonda が、ヒンディー語起源で、アラビア語に対応するものがないためであろうか。

「樹木」の語だけではなく、「作物」そのものの名前も、アラビア語で書かれている。

アラビア語の作物名の後に、作物によっては「…のデラフト」あるいは、樹木でなければ、作物名が直接、ペルシア語で補われているところが多々ある。たとえば、Fol.6の shajar al-‘Inab (ブドウの木) では、dirakht-i Angūr が、Fo.18b の shajar al-Tīn (イチジクの木) の後には dirakht-i Anjīr が、それぞれ補われている。穀物の部分でも、fol.21b の filākhat Khinṭa (小麦) には Gandum (Kandum と書かれるが)、fol.22a の filākhat Sha‘īr (大麦) では、Jaw が続けて書かれている。

作物名がアラビア語でまず書かれているのは、作物「各論」部分が、アラビア語の農書のペルシア語訳であることを暗示するものであろうか。それとも、「見出し」として検索する際に、アラビア語である方が便利な地域で書かれたものなのだろうか。しかし、本文は、一貫してどの部分もペルシア語で書かれている。

それでは、書かれている内容はどのようなものか。以下で検討していくことにしよう。

写本冒頭部分の内容

写本の第1フォリオ a に書かれていることを、最初から訳してみよう。

「農業における第11番目の仕事・適正な土地と悪い土地とをすることの手引き」

耕作のための土地の良し悪しは、以下のとおりである。

雨水が、土地の上に降りかかったときに、土地がそれを透過させ、しかもはね散らさないのであれば、それはよい土地のしるしである。

もしその土地に種々の植物が生育していて、しかも勢いが強ければ、よい土地のしるしである。

もし細く、そしてまっすぐの草が生えていれば、中程度の土地のしるしである。

もし、草が弱々しく、まっすぐでなく、お互いにかみあっていたら、悪い土地のしるしである。

{別のやりかた} (nū‘-i dīgar)

土地を2、3ギャズ掘って、一定の土を取り出し、乳鉢で搗り、雨水を注いで、水が土の上にひたひたになるようにする。そのまま水が透き通るまで置いておく。もし、水の味がもとのまま残っていれば、よい土地である。決して悪いということはない (illā bad)。そのにおいが悪いような土地は、どれも耕作には適さない。(溶いた水が)塩味がする土地は、ナツメヤシの木、葦、タマリスク (Gaz) 以外のどんな木 (dirahkt) も、まったく生育しない。

{別のやり方} (nū‘-i dīgar)

土地を一定量掘り、その土をその穴 (ḥufra) に (下に maghāk の書き込みあり) 入れる。土が穴 (よりも) 多くなれば、その土地はよい。おなじ高さになれば、その土地は中程度である。もし、その穴よりも少なくなれば、(その) 土地は悪い。

{別のやり方} (nū‘-i dīgar)

湿った土地に作付けして、うまく発芽・生育しない場合、その種は乾燥した土地では、よりよく発芽・生育すると知らなければならない。

そして、ちょうどこれとは逆に、いくつかの木は、いくつかの(「土地」が欠落)で、よりよく発芽・生育する。

小麦とソラマメ (Bāqilā) とインゲン豆 (Māsh) を乾燥した土地 (これより fol.1b) 栽培すると (zirā‘at kunannd)、弱々しくなり、虫がその根を食ってしまう。そしてレンズマメとヒヨコマメとそのほかの穀物は、乾燥した土地、湿った土地のどちらでも作付けする (播種する) ことができる (mī-tawān kasht)。

「土地の改良」(sālīh kardan-i zamīn) … (以下の部分は、後述のここ内で述べる)

ペルシア語農書『農業便覧』との比較

この箇所を16世紀にヘラートで書かれた、有名な農書、ハラウィーによる『農業便覧』(*Irshād al-Zirā‘*) と比較してみよう。

『農業便覧』は、全7章よりなっている。その第1章 (rawḍ-i awwal) 「土壌の選定」の中に、きわめて似た表現の箇所がある。

『農業便覧』では、土地の性質を知ることの重要性を説いた後、

{別のやり方} (nū‘-i dīgar)

土地を2、3 ギャズ掘って、それから (pas) (ベルリン写本では「そして」 wa) 一定量の土くれを (kulūkh) (ベルリン写本にはなし) その穴から採る (bi-gīrand) (ベルリン写本では「そこから土 (khāk) をとりあげて (bar dāshta)」、乳鉢で細かくする (narm bi-sāyand) (ベルリン写本では sūda 播って)。そして (wa ベルリン写本になし)、雨水を注いで、水が土の上にひたひたになるようにする。そのまま水が透き通るまで置いておく。もし、水の味がそのままであれば (tā‘am-i āb bi-ḥāl-i khud bāshad、ベルリン写本では、「もとのまま残っていれば」 (bi-ḥāl-i khud bāqī namāyadh)、よい土地である。もし水が塩辛くなれば、その土地は「塩のある耕地 (shūrazār)」である (この文章は、ベルリン写本にはない)。その土に悪いにおいがある土地はどれも、耕作には適さない (ベルリン写本では、「その土に悪いにおいがある (khāk-i ū rā bū-yi bad bubad)」の部分がなく、bū-yi ū bad bubad

「そのにおいが悪いような」となっている)。塩分のある土地は、ナツメヤシと葦とガブラー (Ghubayra、ベルリン写本では kazz (丈夫な)) 以外のどんな木も決して育たない (na-yāyad、ベルリン写本では na-shawad)。

とあって、内容としては変わらないものの、細かな語句がベルリン写本とは異なっている。次の

{別のやり方} (nū‘-i dīgar)

土地を一定量掘り、その土をその穴に入れる。もし土がその穴より多ければ (ベルリン写本では「より (az ān ḥufra の az ān)」が欠けて、意味をなさない)、その土地はよい。もしその土が穴と同じ高さになれば、その土地は中程度である。もしその穴より少なくなれば、その (ān ベルリン写本にはない) 土地は悪い。(『農業便覧』 pp.54-55)

この箇所でも、意味するところは同じであるが、ベルリン写本では、語句が欠けている。特に、比較級の対象を指し示す「より az」がないことは、文法的にも間違った写し方といえる。

ベルリン写本の冒頭部は、『農業便覧』では、第1章の3行目にあたる。『農業便覧』では以下のようになっている。

賢者・ガレノスイわく；雨が土地の上に降りかかったときに、土地がそれを透過させ、(ベルリン写本の「しかも」はない) はね散らすことがなければ (shaqq na-shawad、ベルリン写本では na-shaqq shawad)、それはよい土地のしるしである。

もしその土地に種々の草 (giyāh-hā、ベルリン写本では nabaṭ-hā「植物」) が生えていて、しかも強ければ、よい土地のしるしである。もし細くまっすぐの草が生えていれば (ベルリン写本では、「そして」 (wa) が入っている)、中程度の土地のしるしである。もし草が弱々しく、そして (ベルリン写本に

なし) まっすぐでなく、(ベルリン写本では「そして」(wa)が入っている) 互いにかみあっていれば、悪い土地のしるしである。(『農業便覧』p.54)

となっていて、「賢者・ガレノスいわく」の前置きがついていて、語句にも違いがある(『農業便覧』の方が、ペルシア語の表現としては自然である)が、意味するところは、ほとんど同一である。

『農業便覧』における「土地の改良」の部分は、以下のようになっている。

湿った土地に種を播き(ベルリン写本では「種」が省略されている)、よく発芽・生育しない場合、その種は乾いた土地では、よりよく発芽・生育するというを知らなければならない。(以上は、ベルリン写本と完全に同一文)

「もし乾いた土地に播種して、よく発芽・生育しない場合は、それを湿った土地に播かなければならない。もし高い土地に播種して、よく発芽・生育しない場合は、低い土地に播かなければならない。もし低い土地に播種して、よく発芽・生育しない場合は、高い土地に播種しなければならぬ。いくつかの種は、いくつかの土地でよりよく発芽・生育するし、」

(以上の部分は、ベルリン写本の本文にはなく、「もし高い土地に播種して、よく発芽・生育しない場合は、{逆に}(ベルリン写本のみにある)それを低い土地に播かなければならない」との一文が、別の筆跡で、fol.1a 左下欄外に縦に書き加えられている)

(ベルリン写本では *filākhat* が冒頭に加えられている) 小麦とソラマメとインゲン豆を乾いた土地に作付けすると (*zirā'at kunand*)、弱くなり、害虫が根を切る (*bi-barad*) といわれている(ベルリン写本では、「害虫が根を食う」(*bi-khurad*) となっており、「といわれている」の部分はない)。

そして、レンズマメ、ヒヨコマメ、そのほかの穀物は、乾いた土地、湿った土地のどちらにも作付けできる(この文は、ベルリン写本も、同一)。

収穫がよくあがらない土地にはどこでも、そこに一年間エジプトマメ (*Bāqlā-yi Miṣri*) (ペルシア語ではタルムス *Tarmus* というのだが) を播種

すると、その後では、(ベルリン写本では、「その土地に」が加わる)何を播いてもよくできる。(『農業便覧』 p.55)

「土地の改良」の部分では、ベルリン写本では、土地の乾・湿のうちの「乾」の部分に播種した場合と、土地の高低による差異との文章が、完全に欠落している。その一方で、高低に関する文章の前半部が、欄外に書き加えられている。何かの原本から急いで複写した結果、書き落とした部分ができ、それに気づいた別の書き手が、その一部を後から書き加えたように思われる。

以上をまとめると、二つの農書の、この部分の記述は、意味の上ではほとんど同一といえるほど共通している。違いは、細かな表現上のものである。表現の違いは、筆写時の聞き間違い(発音の似た子音を取り違えて記入する)、見誤り(似た形の文字、点が上にあるか下にあるかの違いなど)によるものではない。

意味が同一であるということは、記憶によって書いたためとも考えられる。しかし、文章の脱落、一部の補充は、写し違いの可能性も示唆している。

いずれにせよ、この部分の比較からは、ベルリン写本と『農業便覧』の間には、緊密な関係があるといえる。

樹木に関する記述の比較

それでは、ベルリン写本中の、作物各論の部分にも、『農業便覧』との関係を感じさせるところがあるだろうか。

ベルリン写本の文中に現れる樹木の数は、穀物、野菜、ハーブに比べても多い。樹木に関する記述の比重が大きいのは、農書の一典型でもある。「樹木各論」が『農業便覧』の当該箇所と、どのように重なるかを検証してみよう。

『農業便覧』の第6章「樹木の農作業(栽培)について」でとりあげられている作物は、以下のとおりである。

- オリーブの木 (dirakht-i Zaytūn) (『農業便覧』以下同様 pp.172-174)
アーモンド (Bādām-i Khujandī) (pp.174-175)
桃 (Shaftālū) (p.175)
ネクタリン (Shalīl) (p.175)
アプリコット (Shāfatlang) (pp.175-176)
ざくろ (Anār) (pp.177-179)
まるめろ (Bah) (pp.180-181)
洋ナシ (Amrūd) (p.182)
りんご (Sīb) (pp.183-184)
さくらんぼ (Ālūbālū) (pp.184-185)
スモモ (Ālū Bukhārā) (p.185)
シャルバティー (Sharbatī) (p.185)
マウユール (黒さくらんぼの一種) (Mawyūl) (p.186)
クロミグワ (Marmanjān) (Shāhtūt Moris nigra) (p.186)
スンマーク (Summāq) (p.186)
バルベリー (Zark) (p.187)
イチジク (Injīr) (pp.188-190)
くるみ (Jawz) (p.191)
ほそばぐみ (Sinjid) (Eloeages angustifolia) (p.192)
なつめ ('Unnāb) (p.192)
ナツメヤシ (Khurmā) (p.193)
桑 (Tūt) (p.194)
ピスタチオ (Fustuq) (p.195)
はしばみ (Funduq) (p.195)
ドゥーラーナ (Dūlāna) (p.196)
胡椒 (Filfil) (pp.196-197)
ねこ柳 (Mushkbīd) (p.197)
すずかけ (Chanār) (p.198)

- 白ボプラ (Safidār) (p.199)
ジャスミン (Yāsāmīn) (pp.199-200)
タチアオイ (Khaṭāmī-yi Khatā'ī) (p.200)
ミロバラン (Shabbadūstān) (pp.200-201)
蔦 ('Ishq pīchān) (p.201)
ヒヤシンス (アスタラーバード種) (Sunbul-i Astrābādī) (pp.201-202)
水仙 (Nastaran) (p.206)
スマレ (Bunafsha) (p.207)
野生種のサフラン (Sūranjān) (p.209)
サフラン (Za'frān) (pp.210-212)
水仙 (Nargis) (p.212)
チューリップ (Lāra) (p.212)
びわ (Kūhī) (pp.213-214)
マジョラム (Kākulī) (p.214)
ゆり (Sūsan) (p.215)
チューリップ (Shaqāyiq) (pp.215-216)
キンセンカ (Hamīshabahār) (Calendula officinalis) (p.216)
けし (Khashkhāsh) (Papaver somniferum) (pp.216-217)
ゆり (Zanbaq) (p.217)
睡蓮 (Nīlūfar) (p.218)
クローブ (Qaranful) (p.218)
タチアオイの一種 (Gul-i Khaṭāmī) (p.219)
ヒモゲイトウ (Būstān afzūd) (Amaranthus caudatus) (p.220)
ヒヤシンス (Sunbul-i Samarqandī) (p.220)
シャブ・ブーイ (Shab būy) (p.221)
クローバー (Saman) (p.221)
ナー・ファルマーン (Nā farmān) (p.221)
タチアオイの一種 (Khīrūja) (p.222)

アグリモニー (Gul-i rawghan kāh) (*Agimonia eupatoria*) (p.222)

ひまわり (Gul-i Kāsni) (p.223)

アルカネット (Gul-i Gāwzabān) (*Anchusa officinalis*) (p.223)

スミレの一種 (Bunafsha kūhī) (*Viola odoratua*) (p.223)

「樹木各論」の中には、果樹、花木、香木をはじめ、花、香草も含まれているが、『農業便覧』の区分にしたがって、そのまま列挙した。また、樹木(果樹)のナーランジュのように、第七章「農家のなすべきさまざまな仕事」の中で、実の保存法のみがとりあげられているものは、ここでは含めていない。作物名と並んで、同等な形で品種名が記されている場合があるが(多くは、バラ、チューリップの品種)、ここではとりあげない。

単純化するため、『農業便覧』「樹木各論」のうちの果樹、樹木に限って、ベルリン写本で「シャジャル、シャジャラ」と表されているものと異同を比べてみた。ベルリン写本ではアラビア語で表記されている品種名が多く、すべてペルシア語の単語(アラビア語起源のものを含むが)である『農業便覧』とは違いがある。ここでは、もとの品種に復元して比較している。

○『農業便覧』、ベルリン写本の双方に含まれているもの

ぶどう

イチジク

ざくろ

洋ナシ

マルメロ

桃

りんご

スモモ

アンズ

桑

さくらんぼ

アーモンド

ピスタチオ

はしばみ

なつめ

びわ

スンマーク

胡椒

オリーブ

○ベルリン写本にあつて『農業便覧』にないもの

檜

栗

ガブラー

テレビンス

テンニンカ

ヘンナ

ゼニアオイ

はくよう

ヒラーフ（一族の「ネコヤナギ」は、『農業便覧』にある）

シトロン

ナーランジュ

レモン

傘松

ノバラ

ココナッツ

バナナ

サトウキビ

カーネーション

ナツメグ

カルダモン

シナモン

白檀

すおう

黒檀

マンゴー

カロнда

○『農業便覧』にあつてベルリン写本にないもの

くるみ

すずかけ

ポプラ（白ポプラを含む）

バルベリー

タチアオイ

ミロバラン

サワーチェリー

ヒモゲイトウ

蔦

となつて、断片であるベルリン写本の方が、取り扱っている「樹木」の種類が多いことに驚かされる。また、それぞれが扱っている「樹木」の品種には、共通のものも多い半面、かなりのずれがあることもわかる。

ベルリン写本では、ナーランジュ（イランでもシーラーズのそれは有名であるが）、レモン、バナナ、サトウキビ、マンゴー、香木類のように南方の作物を含んでいるのに対して、『農業便覧』では、高原、内陸部の樹木が特徴的であることがわかる。この面からも、『農業便覧』のもつ地域性が、あらためて確認されたといえよう。

土壌の部分の記述が酷似していたのに対して、少なくとも、「樹木」の部分に

関していえば、ベルリン写本は、『農業便覧』の一部を抜書きしたのではなく、別の情報源によっているといえるようだ。それを、双方の農書における具体的な農法（農作業）の内容で確認してみよう。

ベルリン写本における農作業（栽培法）各論

Fol.10b ざくろの木の農作業 (filākhat shajar al-Rummān) (dirakht-i Anār) の部分の内容を訳出してみる。

これもまた高貴な樹木である。周囲が広くあいていて、中庸な気候の場所がふさわしい。

作付けのためのもっともよい土地は、暖かく、乾いた土地である。それから採れた種子、ひこばえ、枝からも育てることができる。作付けをしようと望むなら、土地を平らにならし、そこに肥料を多くやる。その後三、四ギャズ（一ギャズは、95cm）ごとに穴を掘り、ひとつの穴に数本の枝を植える。太陽の方に向けて一日中日当たりをよくし、水をやる。挿した枝が、腐らないようにしなければならない。木の上のほうから実をつける。手で折り取る。周辺からは（摘果）しないようにする。実をつけない枝は剪定する。もし地中に湿り気があり、水不足の日もなければ、早く生育する。…後略、(以下は、毎年実をつけない徒長枝の剪定、他の果樹との接木、土壌との適合などが書かれている)

それに対して『農業便覧』におけるざくろについての項は、

ややすっぱい。「冷」で「乾」である。急性の腎炎によい。神経の病には悪い。それを補正するのは、菓子と、その甘みである。肝臓にはよい。咳、偏頭痛の痛みをとる。…（以下、薬効が述べられる……略）

詩：ざくろより不思議はなし あまき笑み

あまさ くちびると歯よりいで 口中に満つ

ややすっぱいもの、すっぱいもの、甘いもの、「黒皮」、「種無し」、「歯より口中」の品種がある。作付けは、種が十分に実るフート月(西暦2月19日～3月30日)に、種を砂で磨き、その後で、播種する。表面に砂を撒き、灌水し、地面を養生させる。もし種が乾燥していたら、水の中に入れてから上述のようにして播く。苗を植えつける場合は、フート月の末に実の外側のものを裂き、頭を下にして播くと、よく活着し、実をよくつける。(後略、以下には、四季の農作業、寒さ対策、二年後、四年後の収穫、移植が書かれている)

このように、「ざくろ」の項目においては、内容の点にでも、ベルリン写本は、『農業便覧』の記述とはまったく異なっている。以上は、双方とも長文のため、一部のみを抜き出して提示した。今度は、別の作物について、それぞれの栽培法の全文を比較してみよう。

ベルリン写本

Fol.15a ピスタチオの農作業 (shajar al-Fustuq/dirakht-i bisata (pista))

サルドシールとギャルムシールの諸地方で生育する。水と肥料を大量に必要とする。その二つに関しては、(必要量は)最も多い。種を播く時期は、春の季節である。種を播こうと望むなら、一、二年、あるいはそれ以上休耕し、そこへ作付けする。もし種が大きければ、その頭を裂いて、中身が出たものを播く。羊毛の切れ端に包んで播き、丈を高くすれば、実の中身が大きく、皮も堅くなる。その(枝を)を Buz と胡桃 (Jawz) の木にも接木することができる。

『農業便覧』におけるピスタチオの農作業

ピスタチオは、「熱」で「乾」である。脳と肝臓によい。黄色のものは、「痢」に悪い。それを補正するものは、トルシー(酢漬け)である。

詩：

望みかなひてこの庭に ピスタチオの口ほころぶるは
世のひとつと ほほえみし女たちのさまをみるが如し

作付けは、以下のとおりである。種を五日間水に漬け、カウス月（西暦11月23日～12月21日）に播く。ピスタチオの口の閉まり方は、適正である。苗に成長したら、どこへ植えつけるにせよ一度灌水し、再度水やりはしない。というのは、水は、それに害があり、もしやれば、うまく生育しない。雨水と雪で十分である。もし、木に実がつかなければ、よい実がつくように接木することができる。木の根から生えた苗木は、植え付けして一度灌水し、再度は水やりをしない。

この記述を比較すれば一目瞭然で、両者には、まったく共通部分はない。

『農業便覧』の作物各論の特徴は、穀物、野菜、樹木を通じて、最初に「熱」「冷」「乾」「湿」による分類が書かれ、次に人の体にたいする薬効、さらに覚えやすくするための詩が付けられていることにある。

ベルリン写本では、寒冷地、温暖地における栽培を念頭において、想定する耕作地域の範囲が広いものであることがわかる。

結 び

ベルリン写本は、最初の土壤に関する部分が、『農業便覧』の記述する内容に酷似している。ただし、細部では、微妙な違いがあり、はたして、この部分を『農業便覧』から直接抜き出したかは、即断できない。

ベルリン写本の作物各論の部分は、樹木が大きな部分を占めている。その種類は、『農業便覧』に記載されているものとは異なっていて、そののみに書かれている作物が多数確認された。『農業便覧』が、ヘラートを中心にイラン西部、アフガニスタン、中央アジアの作物、品種について聞き取りによる詳細な栽培法を記録しているのに対して、ベルリン写本では、対象とする地域が広く、『農

業便覧』に記載されない、南方の作物が多種目記述されている。ただし、地域名は記載されていない。また、作物の品種名についても、ほとんど述べられておらず、栽培法も簡略であるところが多くみられた。

このように、農作業（栽培法）の内容も、相互に比較してみると、まったく異なったものであることがわかる。

冒頭部を読んで、『農業便覧』の一部を抜粋したものとされたベルリン写本は、作物の各論部分で、まったく異なるものであることが確認された。

それでは、この写本を、さらに他の農書と比べると、どのような結果が得られるであろうか。

また、土壌の分類、改良の部分の記述が似ているのは、はたして、今回比較した二つの農書の間だけであろうか。

これらについては、別に論じる必要がある。

参考文献

- 清水宏祐「スレイマニエ図書館・ベルリン国立図書館所蔵のイスラム農書写本について」『史淵』137輯、2000年、1～18頁。「清水1」と略記
- 清水宏祐「Irshād al-Zirā'a における作物栽培法各論(1)、(2)」『史淵』、133、134輯、1996、1997年、55～73、1～19頁。
- 清水宏祐「Irshād al-Zirā'a の農法 穀物栽培における siyāh kisht を中心に」『東方学会創立50周年記念論文集』、1997年、1392～1402頁。
- 清水宏祐「Irshād al-Zirā'a の背景」『オリエント』、第27巻、第1号、1984年、20～38頁。
- 清水宏祐『イスラーム農書の世界』（世界史リブレット）山川出版社、2007年。
- Qāsim b. Yūsuf Abū Naṣrī Harawī, Ed.M.Mushīrī, *Irshād al-Zirā'a*, Tehrān,1346. 『農業便覧』と略記